

家庭における技術革新に関する研究 (第2報)

家庭における技術革新の依存と適応を左右する要因

中島喜代子・成田 美代・湯川 隆子
増田 智恵・吉本 敏子

The Studies on Technical Improvement in Home (Part2)

The Cause That Influence the Dependence and Adaptation on Technical Improvement in Home

Kiyoko NAKAJIMA, Miyo NARITA, Takako YUKAWA,
Tomoe MASUDA, Tosiko YOSHIMOTO

要 約

我々の家庭生活を取り巻く、急速な技術革新の進展の状況の中で、生活の向上とともに様々な問題が生じている。そこで、こうした技術革新への依存の実態と適応の実態を左右する要因について明らかにすることを目的として調査を実施した。団地と農村の主婦を対象として、1994年1月～2月にかけてアンケート調査を行い、団地1,111世帯、農村918世帯の有効サンプルを得た。分析の結果、次のような知見が得られた。

モノ所有による技術革新への依存は、空間的に余裕があり、家事の合理化が必要な場合に大きい。家庭生活の合理化や技術革新に対する態度が積極的・肯定的な場合にも、依存度は大きくなる。サービス使用による技術革新への依存は、家庭生活の合理化が特に切実でない家族状況の場合に大きく、サービス使用は現実には家庭生活の合理化に対して大きな比重をもっていないと考えられる。しかし、家庭生活の合理化方策や技術革新に対する積極的・肯定的な態度が大きく影響しており、現状では意識面のリードが大きい。

技術革新に対する適応については、年齢、夫・妻の職業等との関連が部分的にとらえられるが、全体としては核家族や団地居住者等においてメリット評価とデメリット評価の両側面で生活への大きな影響を示しており、技術革新に対してより意識的に関わっていることが技術革新に対する適応を左右する大きな要因になっていることが明らかになった。

1. はじめに

技術革新によって、家庭とりまく製品は、パーソナル化、システム化、装置化、小型化・軽量化あるいは大型化、高性能化・機能の複合化等が生じており、これによって使用の簡便化とともに、いつでも、どこでも、誰でもという、時間、空間、使用者の選択性が増加した。同時に、時間や労働力面に対する軽減化を生み、生活にゆとりが生じてきた。これによって、消費者の中に個性化、多

様化、楽しみ化への要求が大きくなってきている^{1)～6)}。しかし、一方で、製品の仕組のブラックボックス化によって、一度故障等のトラブルがあると対応し切れなくなっている。また、モノの過度な持ち込みによる住空間の圧迫・混乱等もある。このようなモノ自体に関わる問題だけでなく、使用者個人の精神・心理面あるいは肉体機能面への障害、家庭における家族関係や家計への障害、さらに社会における環境問題やデコミュニケーション、プライバシーの侵害等への障害等も現れ

ている⁷⁾。

こうした技術革新の進展に伴う依存度の増大と、適応障害が増大する中で、その依存と適応がどのような要因によって左右されるのかを明らかにすることは、この問題を解明する上で、大きな意義があると考えられる。

そこで、本報では、第1報で報告したモノの所有とサービスの使用、および各生活領域を代表させて調査した6品目のうち「保育サービス」を除いた「洗濯機」「電子レンジ」「電話」「クレジットカード」「自家用自動車」の5品目に対するメリット評価とデメリット評価を左右する要因について検討する。保育サービスを分析対象から除いたのは、モノに対する評価とサービスに対する評価には、かなりの評価基準の違いがあるためである。

また、本論文の立場として、適応することが無条件に良いことであるとは考えない。不適応の状況が、今後の技術革新のあり方を考える上には大きな意味があると考ええる。

2. 研究の方法

調査方法、調査対象等は第1報と同様である。

モノ所有については、「衣生活」、「食生活」、「住生活」、「生理・衛生」、「AV機器・事務機器」、「住宅設備」の6領域別にその所有品目数を算出した（各領域の具体的な調査品目については第1報を参照されたい）。サービス使用については、「家庭経営」、「衣生活」、「食生活」、「住生活」、「家族関係」、「趣味等」の6領域別にその使用数を算出した（各領域の具体的な調査サービスについては第1報を参照されたい）。また、所有している5品目に対するメリットとデメリット評価については、第1報で示した適応分析軸a人間発達軸（a1精神・心理面、a2肉体機能・健康面）、b生活の合理化・効率化軸（b1時間面、b2空間面、b3経済性面、b4労働力面）、cモノ自体の性格軸（c1性能・機能・取り扱い難易度、c2修理・補修、トラブル時の対応）、d家族・社会軸（d1家庭内、d2家庭外）のa1～d2の各軸の各側面別に調査した5品目を合計してその評価項目数を算出した（具体的な評価項目の内容は、第1報を参照されたい）。評価項目数の算出の仕方は、「特に思う」「思う」「思わない」の3選択枝の中から「特に思う」「思う」に回答したものについてカウ

ントしている。

分析に用いた関連要因は、家族条件（家族人数、家族型、夫職業、妻職業、妻の年齢）、空間条件（居住地域、居住年数、部屋数、延床面積）、家事合理化の状況（家族の協力、外部サービス等の利用、便利な道具の導入、情報利用の強化、地域・友人との共同、住まい・台所の改造）、技術革新に対する態度（技術革新を家庭に取り入れることに対する態度、技術革新と人間発達との関わりについての考え）の4側面であり、これらの要因別にモノ所有、サービス使用、メリット評価とデメリット評価の領域あるいは軸別各側面の個数を算出し、技術革新に対する依存と適応の実態を左右する要因について検討した。

3. 調査結果と考察

1) モノ所有品目数、サービス使用数、メリットとデメリットの評価数の傾向について

① モノ所有品目数

各領域別のモノ所有品目数を、図1に示す。「衣生活用品」、「食生活用品」、「住生活用品」、「生理・衛生用品」については、その平均所有品目数は、全調査品目数のほぼ中央に位置しており全品目の約5～6割所有されているが、「AV機器・事務機器」と「住宅設備」は中央より少ない方に片寄っており、「AV機器・事務機器」で約4割、「住宅設備」で約3割の所有で全体的に所有品目数は少ない傾向がある。

② サービス使用数

各領域別のサービスの使用数を、図2に示す。各領域の平均サービス使用数が各領域の全調査サービス数に占める割合は、約1～4割となっており、モノ所有の場合よりもかなり少なくなっている。特に「家族関係」のサービス使用は少なく、「食生活」領域のサービス使用はやや多い。

③ メリット評価数

各適応分析軸の各側面別のメリット評価数を、図3に示す。各側面における平均メリット評価数が全調査メリット評価数に占める割合は約2～5割である。評価数の割合が高いのは、「生活の合理化・効率化」軸の時間面（b1）と労働力面（b4）、モノ自体の性格軸の性能・機能・取り扱い難易度面（c1）であり、逆に少ないのは人間発達軸（a）と家族・社会軸の家族への影響面（d1）である。

家庭における技術革新に関する研究（第2報）

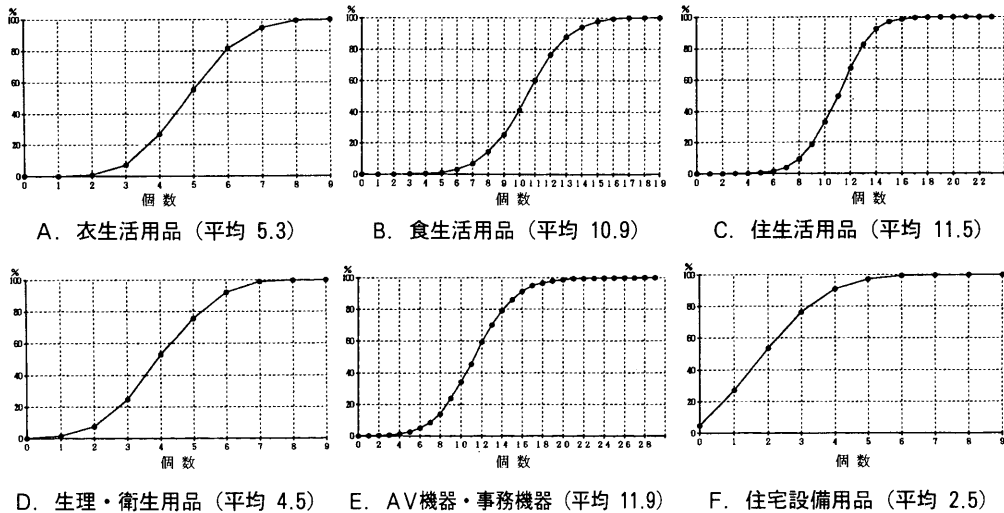


図1 モノ所有数の傾向

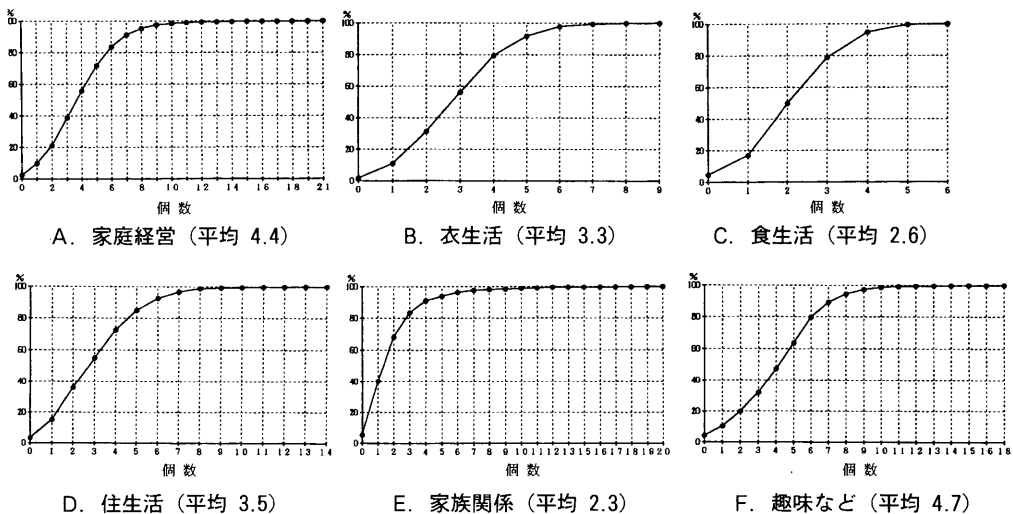


図2 サービス使用数の傾向

すなわち、技術革新に対しては、時間面、労働面
 面の軽減化とモノ使用の簡便化を評価している
 が、使用者個人の精神的、肉体的機能の発達や家
 族のコミュニケーション等への影響に対する評価
 は低い。

④ デメリット評価数

各適応分析軸の各側面別のデメリット評価数を、
 図4に示す。各側面における平均デメリット評価

数が全調査デメリット評価数に占める割合は約
 1～2割であり、メリット評価の場合より少なくな
 っている。その中でもややデメリット評価が多
 いのは、生活の合理化・効率化軸の経済性面
 (b3)と家族・社会軸の社会への影響面 (d2)で
 ある。

すなわち、技術革新によって、経済的な圧迫や
 社会への影響について、問題意識を感じていると

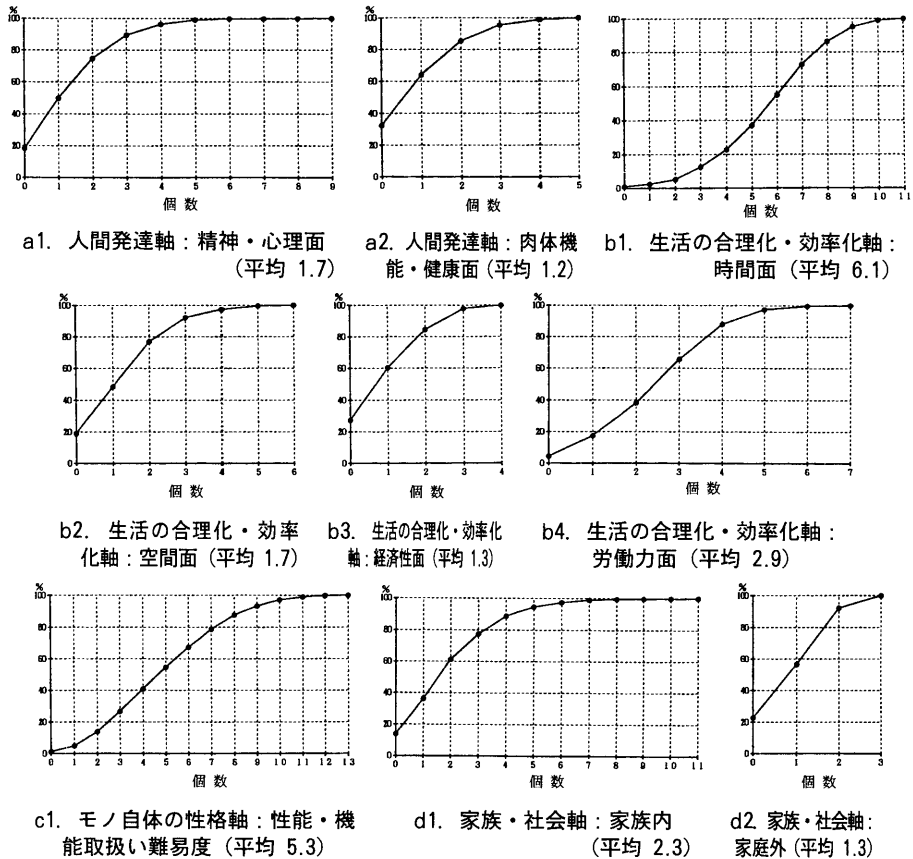


図3 メリット評価数の傾向

考えられる。

2) モノ所有を左右する要因

各生活領域におけるモノ所有の品目数と家族条件（家族人数、家族型、夫職業、妻職業、妻の年齢）、空間条件（居住地域、居住年数、部屋数、延床面積）、家事合理化の状況（家族の協力、外部サービス等の利用、便利な道具の導入、情報利用の強化、地域・友人との共同、住まい・台所の改造）、技術革新に対する態度（技術革新を家庭に取り入れることに対する態度、技術革新と人間発達との関わりについての考え）の4側面との関連を分析する。

① 家族条件

各生活領域のモノ所有について、各家族条件のカテゴリー別に算出した平均所有品目数を、図5に示す。「AV機器・事務機器」、「衣生活用品」、

「生理・衛生用品」「食生活用品」では、家族人数の多い方が所有品目数が増加し、同時に拡大家族の方が所有品目数が多くなっており、家族構成による影響が大きい。しかし、住生活用品や住宅設備等世帯単位での使用が多いものについては影響は顕著でない。

また、「衣生活用品」、「AV機器・事務機器」、「食生活用品」、「住生活用品」等多くの生活領域で、若年層に所有品目数が多い傾向がみられる。

妻の職業では、「AV機器・事務機器」、「衣生活用品」、「住生活用品」、「住宅設備用品」等多くの生活領域において、有職の場合に、所有品目数が多くなっている。夫の職業では、「食生活用品」、「住生活用品」、「生理・衛生用品」、「AV機器・事務機器」等多くの生活領域で、管理職や自営業に所有品目数が多くなっているが、「衣生活用品」では、農業や自営業に所有品目数が多い。

家庭における技術革新に関する研究（第2報）

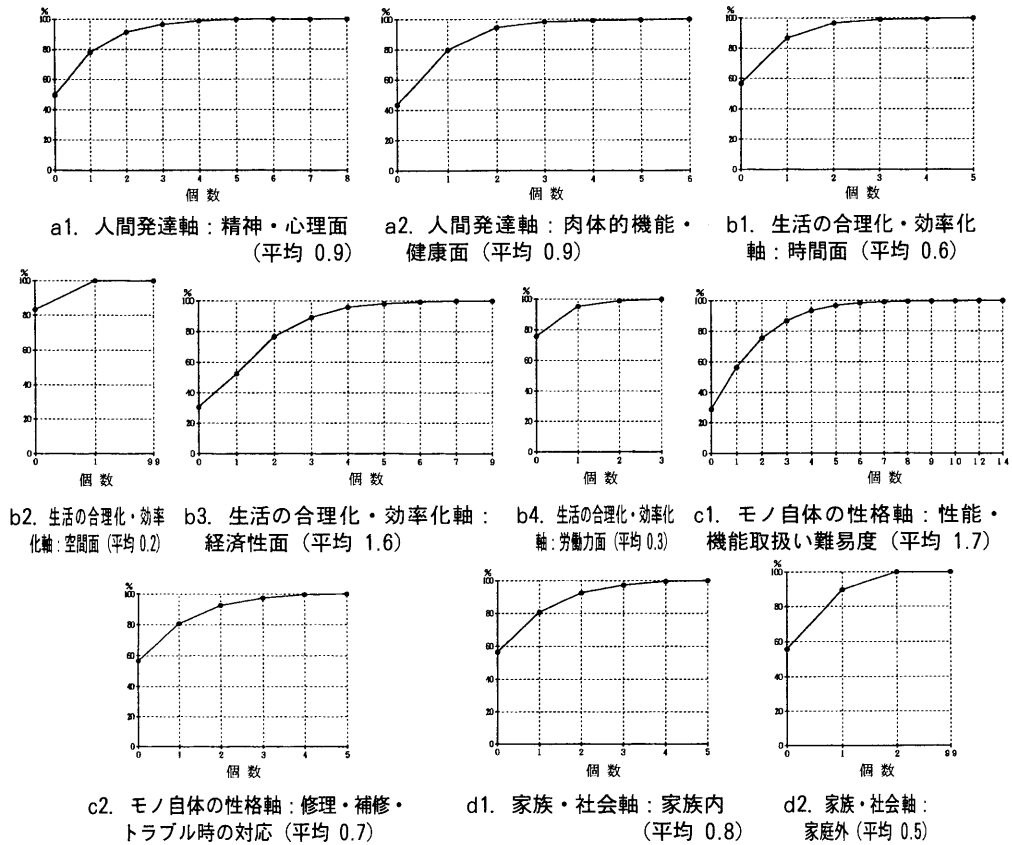
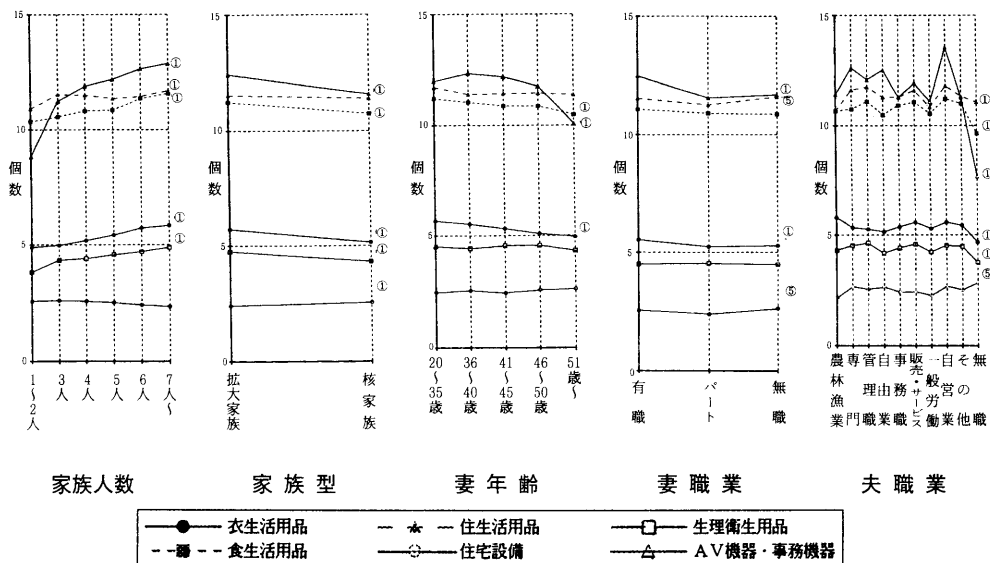
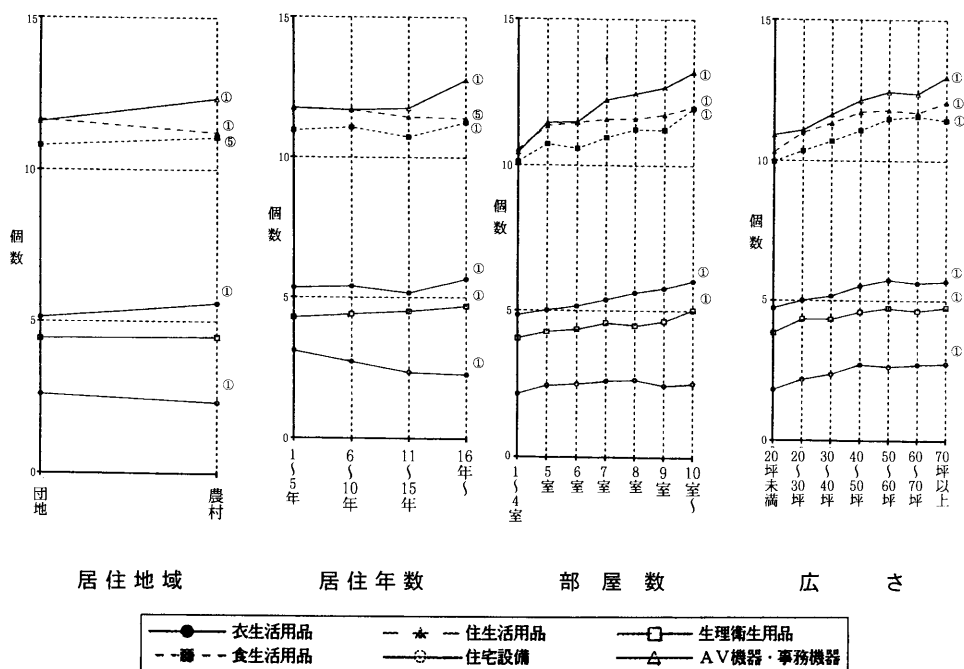


図4 デメリット評価数の傾向



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図5 モノ所有数と家族条件との関連



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図6 モノ所有数と空間条件との関連

② 空間条件

各生活領域のモノ所有について、各空間条件のカテゴリー別に算出した平均所有品目数を、図6に示す。

「衣生活用品」、「食生活用品」、「AV 機器・事務機器」は農村地域に所有品目数が多く、同時に居住年数が長い場合に多くなっている。「住生活用品」、「住宅設備用品」については、団地居住者で所有品目が多く、居住年数の短い場合に多くなっており、新興住宅や建築年度の新しさが大きな要因になっている。

部屋数、延床面積に共通して、住宅が広い場合に各生活領域において所有品目数が増えるが、特に、「衣生活用品」、「食生活用品」、「住生活用品」、「AV 機器・事務機器」において顕著である。

③ 家庭生活の合理化に対する方策

各生活領域のモノ所有について、各家庭生活の合理化に対する方策の有無別に算出した平均所有品目数を、図7に示す。

家庭生活を合理化するためにとっている方策について調査した。方策の内容は、1 家族の協力をたかめる（家族協力）、2 外部サービス・外部委託の利用（外部サービス利用）、3 便利な道具

（家電製品を含む）の導入（便利な道具導入）、4 情報利用・管理の強化（情報利用）、5 地域・友人との共同・連携（地域共同）、6 住まい・台所などの改造（住まい改造）、の6 側面であり、それぞれについて行っているかどうかを問うている（以下の文中では、（ ）のように略す）。

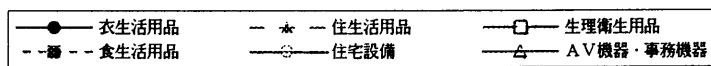
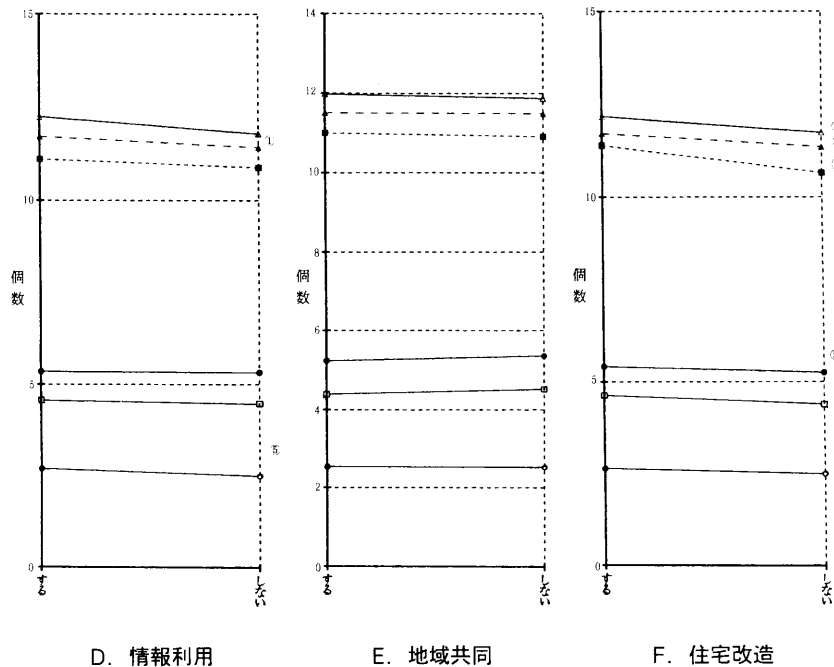
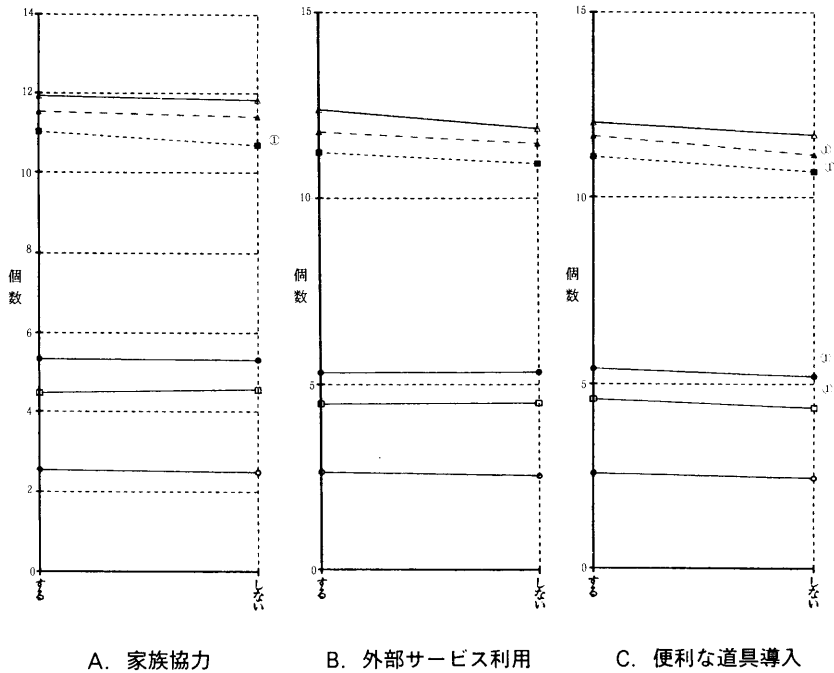
全ての生活領域において、「便利な道具導入」や「住まいの改造」を行っている場合に所有品目数が増えている。また、「食生活領域」では「家族協力」を行っている場合に、「住生活領域」、「住宅設備」、「AV 機器・事務機器」では「情報利用」を行っている場合に所有品目数が増加している。

すなわち、モノや空間によって生活の合理化を図っている場合には全般的にモノの所有が増加し、新しい合理化方策である「情報利用」を行っている場合には、住関係やAV用品が増加している。また、家族のコミュニケーションや楽しみ化とつながる「家族協力」を行っている場合には、家族共同的性格の強い食生活領域の所有が増加する傾向があるといえる。

④ 技術革新に対する態度

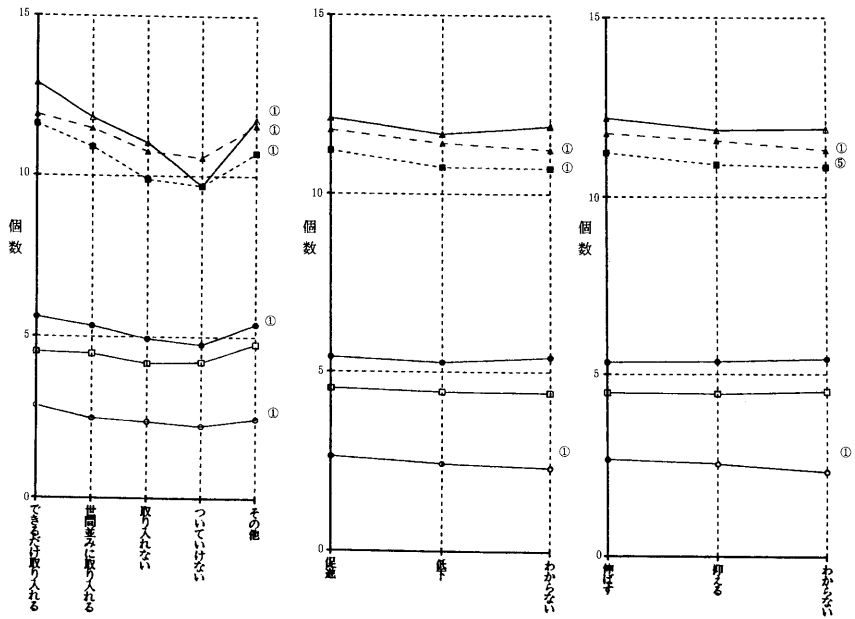
各生活領域のモノ所有について、各技術革新に

家庭における技術革新に関する研究（第2報）



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

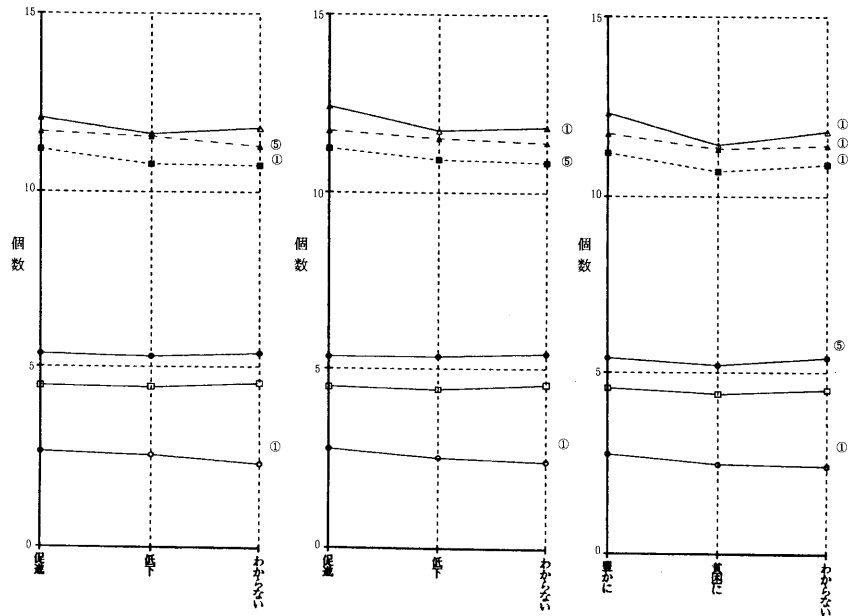
図7 モノ所有数と家庭生活の合理化方策との関連



A. 技術革新の家庭への取り入れ

B. 人間の技能

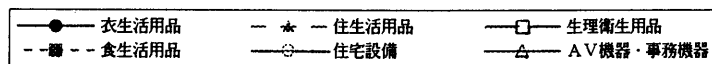
C. 人間の個性



D. 人間の知的能力

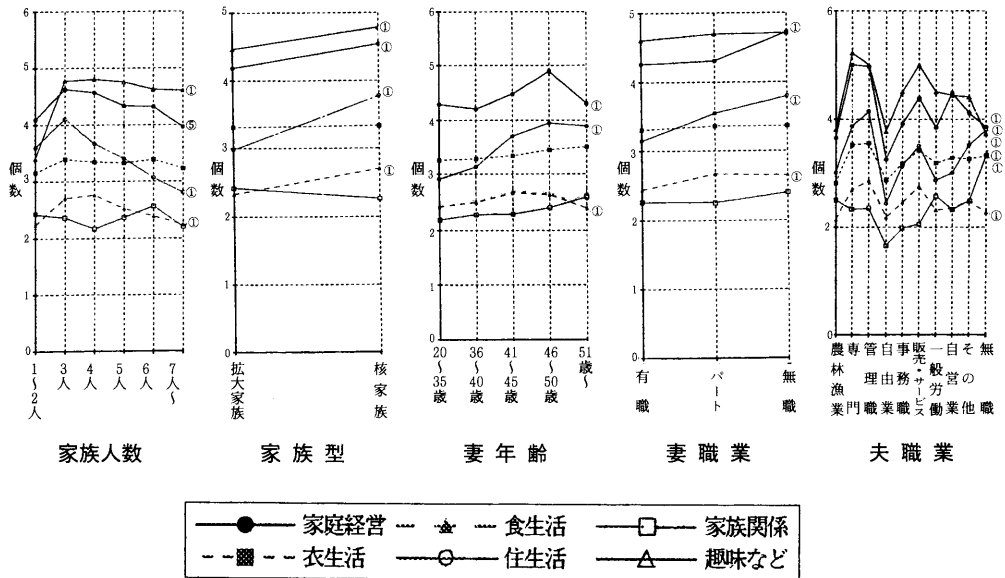
E. 人間の情操・感性

F. 人間関係・家族関係



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図8 モノ所有数と技術革新に対する態度との関連



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図9 サービス使用数と家族条件との関連

対する態度のカテゴリー別に算出した平均所有目数を、図8に示す。

技術革新に対する態度として、技術革新を家庭に取り入れることに対する考え方を調査している。回答は、1 技術革新をできるだけ取り入れて、生活を便利にしたい（取り入れる）、2 技術革新は世間並に適度に取り入れたい（世間並に取り入れる）、3 技術革新によって、人間や生活に歪みが出てくるので、できるだけ取り入れないようにしたい（取り入れない）、4 技術革新にはついていけない（ついていけない）、5 その他、の5 カテゴリーから1つを選択する方法をとった（以下の文中では（ ）内のように略す）。また、技術革新が人間発達に対する関わりについての考えを調査した。人間の発達の側面として、1 人間の技能、2 人間の個性、3 人間の知的能力、4 人間の情操や感性、5 人間関係や家族関係、の5項目について、それぞれ「促進する」「低下させる」「わからない」の3選択から1つを選択する方法とした。

技術革新の家庭への取り入れに対して積極的な場合に、「生理・衛生用品」を除く全ての生活領域でモノ所有が増加している。

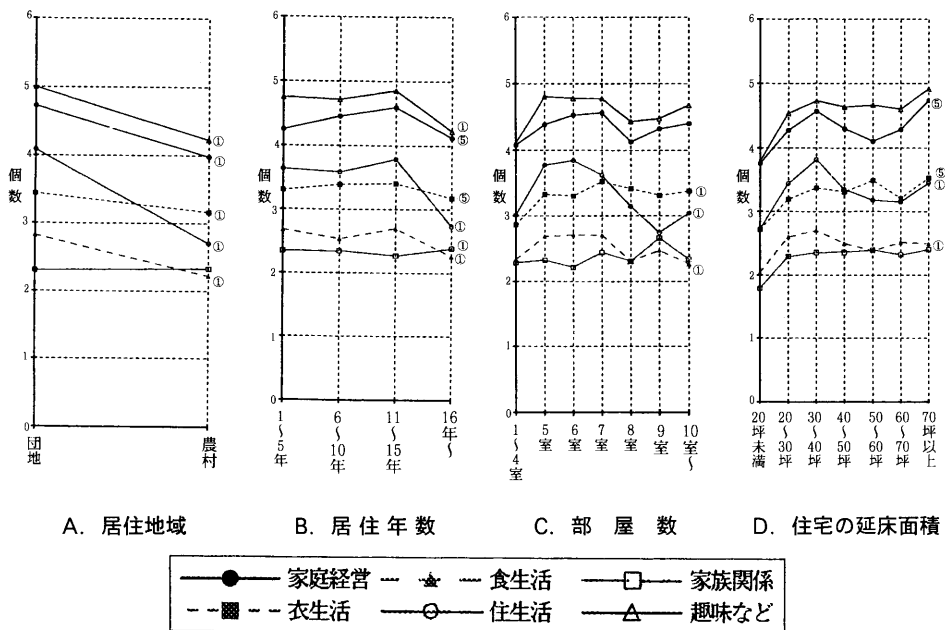
「食生活用品」、「住生活用品」、「住宅設備用品」については、人間発達の多くの部分と関連しており、技術革新が人間発達を促すと考える場合にモノ所有が増加している。

モノ所有が増加している。また、人間発達面のうち、人間関係・家族関係を豊かにすると考える場合には、生活の全ての領域におけるモノ所有が増加している。すなわち、食や住の部分におけるモノ所有は、特に技術革新に対する態度との関連が強く、また、人間発達面の中で、個人の能力等と異なる人間関係・家族関係という人のコミュニケーション部分に対しても技術革新が良い影響を与えると考える場合には、モノ所有の増加に対して大きな影響があるといえる。

以上のように、モノ所有は、家族条件や空間条件が大きく影響している。すなわち、空間的に余裕があり、家庭生活の合理化を必要とする家族条件がモノ所有に影響している。また、若い世代にモノ所有が多く、建設年度の新しい家庭に多い。さらに、家庭生活の合理化をモノや空間によって図ろうとしている場合にモノ所有が多く、技術革新を家庭に積極的に取り入れ、技術革新が人間発達に与える影響を肯定的にとらえる場合に、モノ所有が増加するといえる。

3) サービス使用を左右する要因

各生活領域におけるサービス使用の項目数と家族条件（家族人数、家族型、夫職業、妻職業、妻



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図10 サービス使用数と空間条件との関連

の年齢)、空間条件(居住地域、居住年数、部屋数、延床面積)、家事合理化の状況(家族の協力、外部サービス等の利用、便利な道具の導入、情報利用の強化、地域・友人との共同、住まい・台所の改造)、技術革新に対する態度(技術革新を家庭に取り入れることに対する態度、技術革新と人間発達との関わりについての考え)の4側面との関連を分析する。

① 家族条件

各生活領域のサービス使用について、各家族条件の категория別に算出した平均所有品目数を、図9に示す。

家族人数では、3～4人の家族で、家族型では、核家族でサービス使用が多くなっている。

妻の年齢では、「家庭経営」や「住生活」サービス等家事労働に関係の強いサービスでは、高齢層に使用が多くみられ、「趣味など」のサービス使用は、若年層に多い等、生活領域によって違いがみられる。

妻の職業では、「家庭経営」、「住生活」、「食生活」等へのサービス使用は、無職あるいはパートの場合に多くなっている。夫の職業では、「家族関係」を除く他の生活領域の諸側面において、専

門職、管理職でサービス使用が多くなっている。すなわち、あまり家庭生活の合理化が必要な家族条件でない場合やホワイトカラー層でサービス使用が多くなっているといえる。

② 空間条件

各生活領域のサービス使用について、各空間条件の категория別に算出した平均使用項目数を、図10に示す。

居住地域では、「家族関係」のサービスを除く他の生活領域の諸側面に対するサービス使用において、団地居住者の方が多くなっている。同時に、居住年数も長くない場合にサービス使用は多くなっている。

部屋数、延床面積等の住宅の広さの側面では、「衣生活」、「食生活」、「住生活」サービスについて、中規模の場合に使用が多くなっており、モノ所有の場合のような空間的な余裕とは関連が無いといえる。また逆に、空間的余裕が無いことによってモノ所有よりもサービス使用に依存するという関連もみられない。

③ 家庭生活の合理化に対する方策

各生活領域のサービス使用について、各家庭生活の合理化に対する方策の有無別に算出した平均

家庭における技術革新に関する研究（第2報）

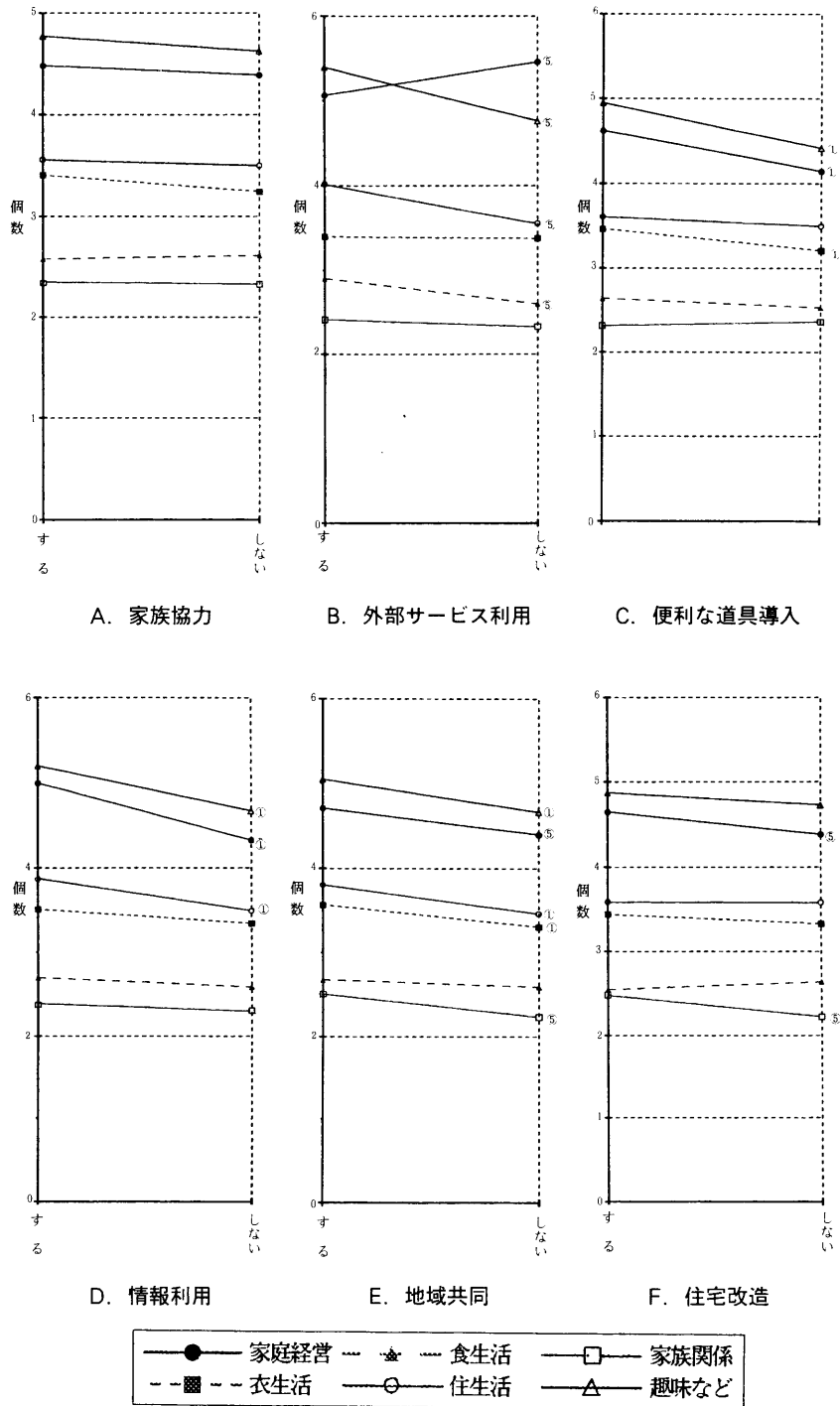


図11 サービス使用数と家庭生活の合理化方策との関連

所有品目数を、図 11 に示す。

「家庭経営」、「食生活」、「住生活」のサービス使用については、家庭生活の合理化を「外部サービス」によって図る場合に多くっており、「家庭経営」、「衣生活」、「住生活」、「家族関係」のサービス使用は、「情報利用」あるいは「地域共同」によって家庭生活の合理化を図る場合に多くなっている。しかし、「趣味など」のサービス使用は、家庭生活の合理化方策との関連はみられない。すなわち、家事労働との関連が強い生活領域においては、「外部サービス」や「情報利用」「地域共同」等の家庭外での社会的合理化方策をとる場合に、サービス使用が多くなるといえる。

④ 技術革新に対する態度

各生活領域のサービス使用について、各技術革新に対する態度のカテゴリー別に算出した平均所有品目数を、図 12 に示す。

技術革新を家庭に取り入れることに積極的な場合に「家庭経営」や「趣味など」のサービス使用が多くなっている。また、技術革新と人間発達との関わりに対する考えとの関連では、技術革新が人間の技能を促進すると考える場合に「衣生活」のサービス使用が増加する。同時に、人間の個性に対しては「住生活」サービス使用が、人間の知的能力に対しては「家族関係」を除く生活領域諸側面のサービス使用が、人間関係・家族関係に対しては「衣生活」サービスの使用が増加している。

すなわち、モノ所有の場合ほど顕著ではないが、技術革新を家庭に取り入れることに積極的な場合にサービス使用が増加し、技術革新が人間発達を促進すると考える場合にサービス使用が増加する傾向がある。しかし、儀式・行事との関わり合いの強い「家族関係」へのサービス使用については、技術革新に対する態度との関連はみられない。

以上のように、サービス使用を左右する要因は、モノ所有の場合と大きく異なっている。空間条件として空間的余裕あるいは狭さとの関連はなく、むしろ、サービス機関の立地条件による側面による影響が強いと考えられる。また、家事合理化を特に必要としないと考えられる専業主婦の場合にサービス使用が多い。また、妻の高齢層でサービス使用が多く、モノ所有が若年層に多かったことと合わせて考えると、高齢層はモノ所有によって生活の合理化を図るよりもサービス使用による解決を図っていると考えられる。

家庭生活の合理化方策との関連では、家庭外での社会的解決を図る場合にサービス使用が多く、また、モノ所有の場合ほど顕著ではないが、技術革新の家庭への取り入れに積極的で、人間発達面との関連も肯定的な場合にサービス使用が多くなるといえる。

4) メリット評価を左右する要因

各適応分析軸の各側面におけるメリット評価数と家族条件（家族人数、家族型、夫職業、妻職業、妻の年齢）、空間条件（居住地域、居住年数、部屋数、延床面積）、家事合理化の状況（家族の協力、外部サービス等の利用、便利な道具の導入、情報利用の強化、地域・友人との共同、住まい・台所の改造）、技術革新に対する態度（技術革新を家庭に取り入れることに対する態度、技術革新と人間発達との関わりについての考え）の4側面との関連を分析する。

① 家族条件

各適応分析軸の各側面のメリット評価数について、各家族条件のカテゴリー別に算出した平均評価数を、図 13 に示す。

家族人数との関連はあまり顕著ではないが、家族型では、核家族の場合に「生活の合理化・効率化軸（b）」と「家族への影響」（d1）に対して、メリット評価数が多くなっている。

妻の年齢では、「肉体機能・健康面」（a2）、「労働力面」（b4）に対するメリット評価数は高齢層で多く、「時間面」（b1）に対するメリット評価数は若年層で多くなっている。また、「性能・機能・取り扱い難易度」（c1）に対しては、若年層と高齢層の両端で、メリット評価されている。

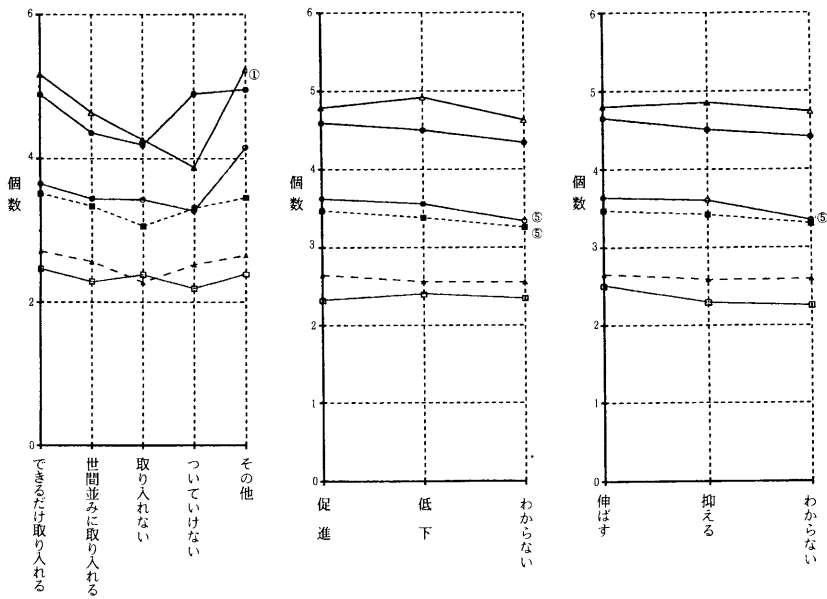
妻の年齢では、「空間面」（b2）、「労働力面」（b4）に対するメリット評価数は有職者に多く、「肉体機能・健康面」（a2）、「経済性」（b3）、「家族への影響」（d1）に対するメリット評価数は専業主婦に多い。夫の職業では、「生活の合理化・効率化」（b）に対するメリット評価数は専門職・管理職で多く、「人間発達軸」（a）と「家庭外への影響」（d2）に対するメリット評価数は、農業・自営で多くなっている。

② 空間条件

各適応分析軸の各側面のメリット評価について、各空間条件のカテゴリー別に算出した平均評価数を、図 14 に示す。

「精神・心理面」（a1）、「生活の合理化・効率

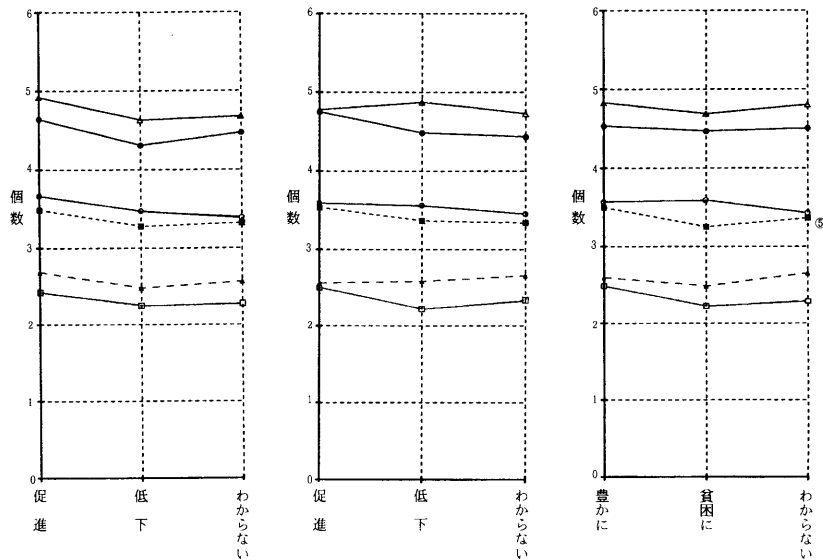
家庭における技術革新に関する研究（第2報）



A. 技術革新の家庭への取り入れ

B. 人間の技能

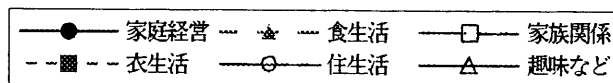
C. 人間の個性



D. 人間の知的能力

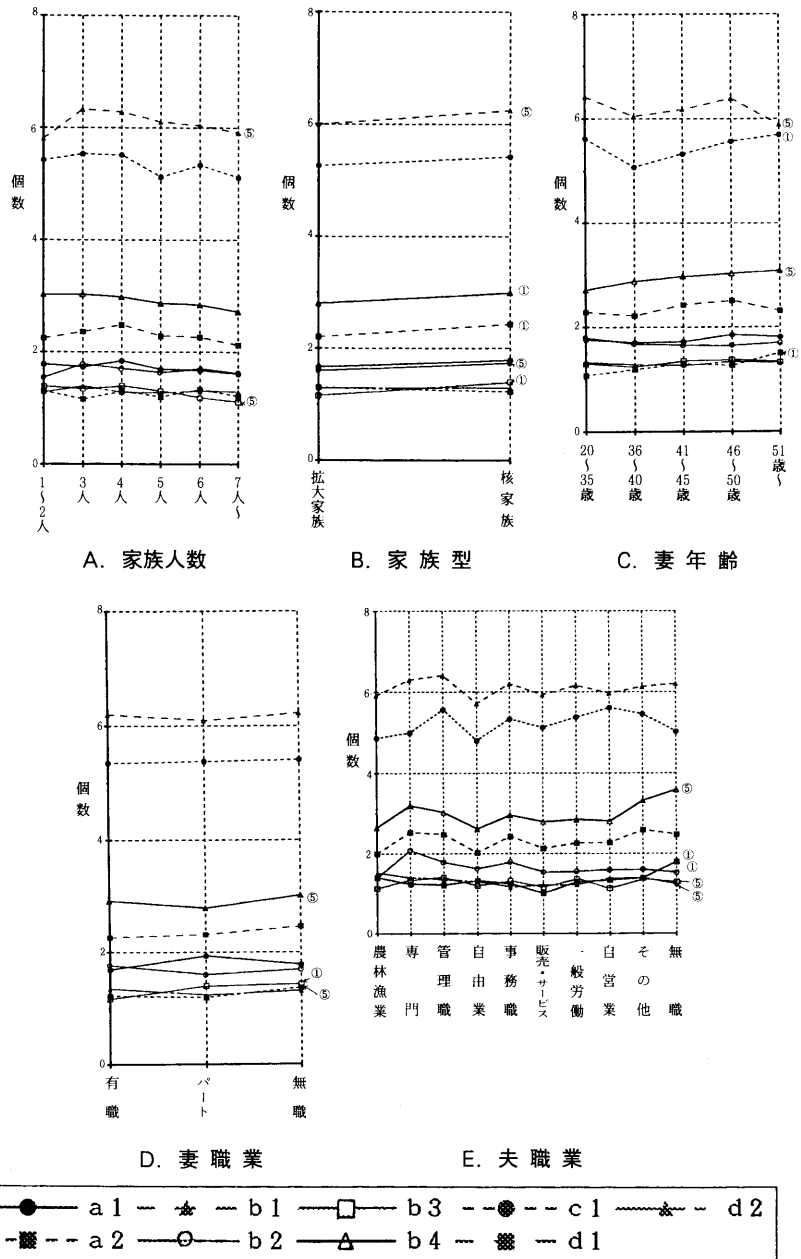
E. 人間の情操・感性

F. 人間関係・家族関係



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図12 サービス使用数と技術革新に対する態度との関連



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

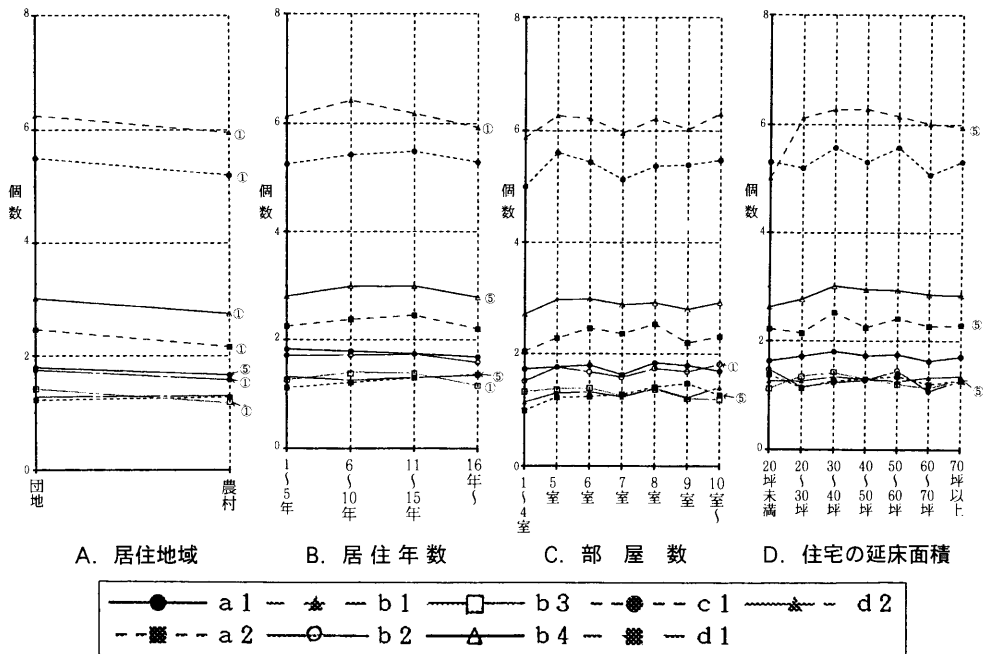
図13 メリット評価数と家族条件との関連

化」(b)、「性能・機能・取り扱い難易度」(c1)、「家族への影響」(d1)に対するメリット評価数は、団地居住者で多くなっている。しかし、部屋数、延床面積等の住宅の広さとの関連はみられない。

③ 家庭生活の合理化に対する方策

各適応分析軸の各側面のメリット評価について、各家庭生活の合理化に対する方策の有無別に算出した平均評価数を、図15に示す。

家庭生活の合理化を積極的に行おうとしている家庭では、どのような合理化の方策をとる場合に



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図14 メリット評価数と空間条件との関連

においても、全ての面においてメリット評価が高くなっている。

④ 技術革新に対する態度

各適応分析軸の各側面のメリット評価について、各技術革新に対する態度のカテゴリー別に算出した平均評価数を、図16に示す。

技術革新を家庭に取り入れることに積極的な場合に全ての面についてメリット評価が多くなっている。

人間発達面との関連は、基本的に人間発達を促進すると考える場合に、メリット評価が高い。

5) デメリット評価を左右する要因

各適応分析軸の各側面におけるデメリット評価数と家族条件（家族人数、家族型、夫職業、妻職業、妻の年齢）、空間条件（居住地域、居住年数、部屋数、延床面積）、家事合理化の状況（家族の協力、外部サービス等の利用、便利な道具の導入、情報利用の強化、地域・友人との共同、住まい・台所の改造）、技術革新に対する態度（技術革新を家庭に取り入れることに対する態度、技術革新と人間発達との関わりについての考え）の4側面との関連を分析する。

① 家族条件

各適応分析軸の各側面のデメリット評価について、各家族条件のカテゴリー別に算出した平均評価数を、図17に示す。

家族人数が3～4人の中規模の家庭で、デメリット評価が多い。家族型では、「モノ自体の性格軸」(c)を除き、他の諸側面に対して核家族の場合に、デメリット評価数が多くなっている。

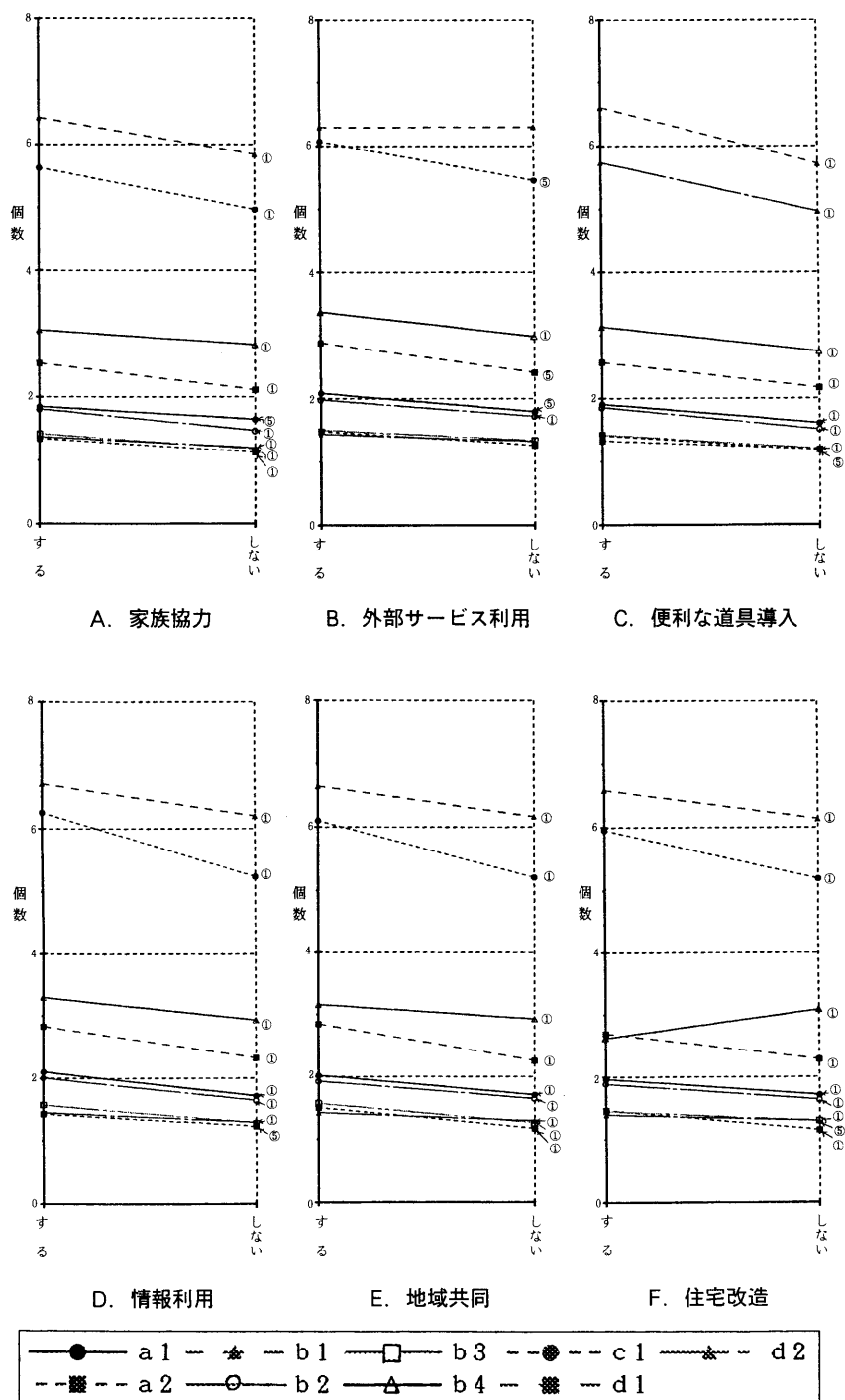
妻の年齢では、「精神・心理面」(a2)、「時間面」(b1)、「空間面」(b2)、「社会への影響」(d2)に対して、高齢層でデメリット評価が多い。

妻の職業では、「精神・心理面」(a2)、「空間面」(b2)、「社会への影響」(d2)に対して、専門職・管理職でデメリット評価が多く、「モノ自体の性格軸」(c)に対しては、自営業と一般職でデメリット評価が多い。また、社会への影響(d)に対しては、専門職・一般職・自営業で、デメリット評価が多くなっている。

② 空間条件

各適応分析軸の各側面のデメリット評価について、各空間条件のカテゴリー別に算出した平均評価数を、図18に示す。

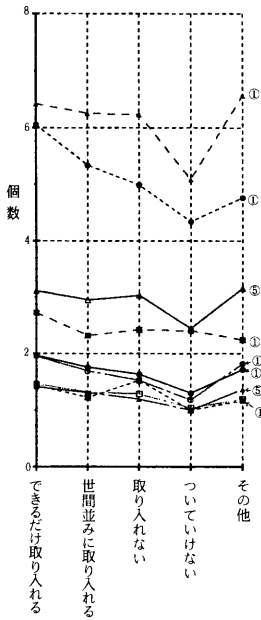
「人間発達軸」(a)、「モノの性格軸」(b)に



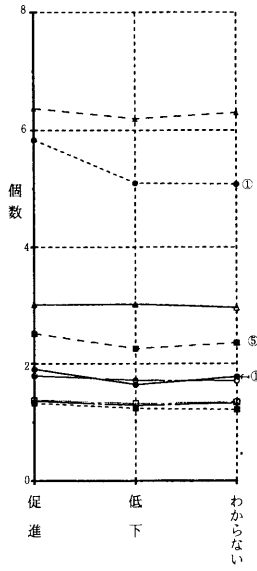
○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図15 メリット評価数と家庭生活の合理化方策との関連

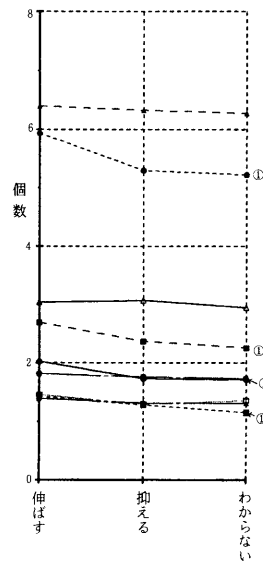
家庭における技術革新に関する研究（第2報）



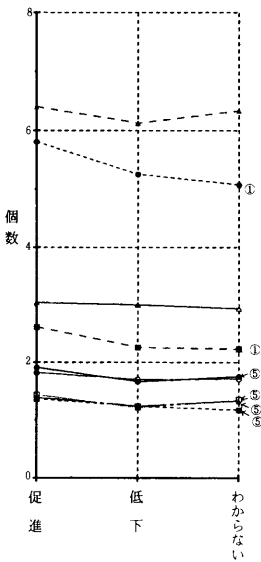
A. 技術革新の家庭への取り入れ



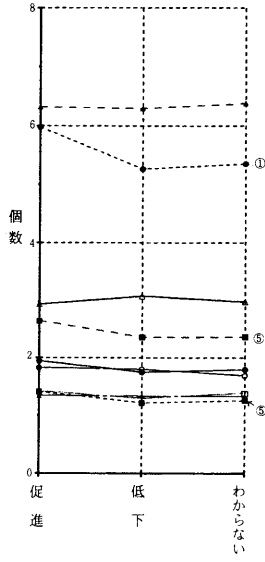
B. 人間の技能



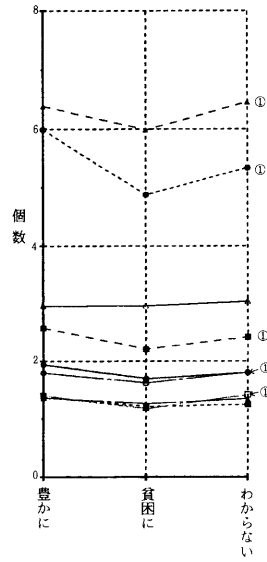
C. 人間の個性



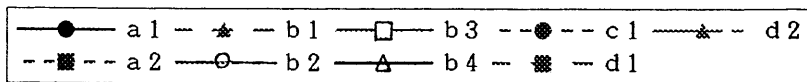
D. 人間の知的能力



E. 人間の情操・感性

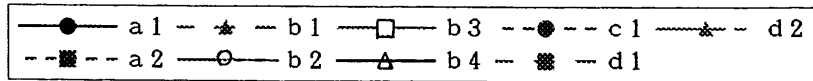
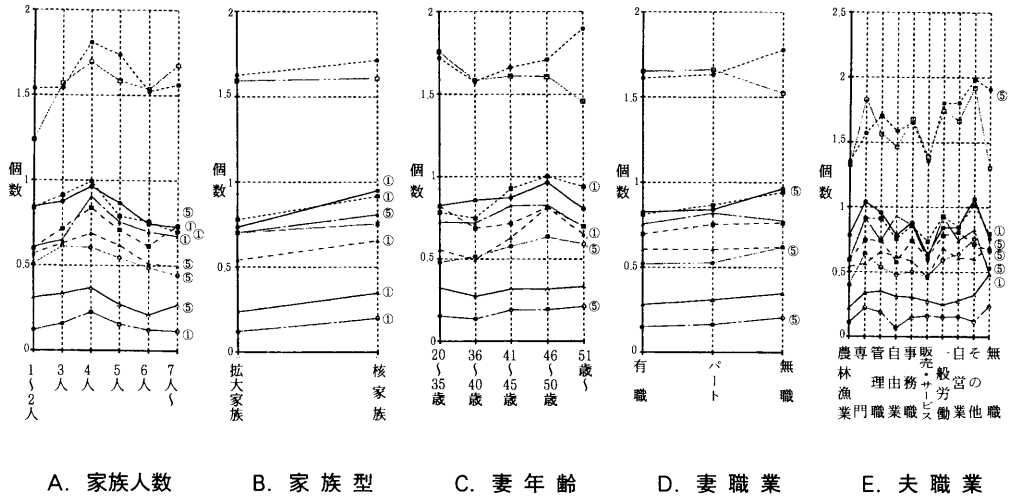


F. 人間関係・家族関係



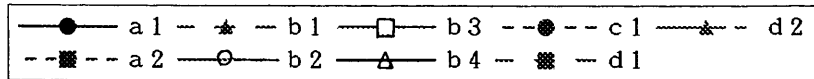
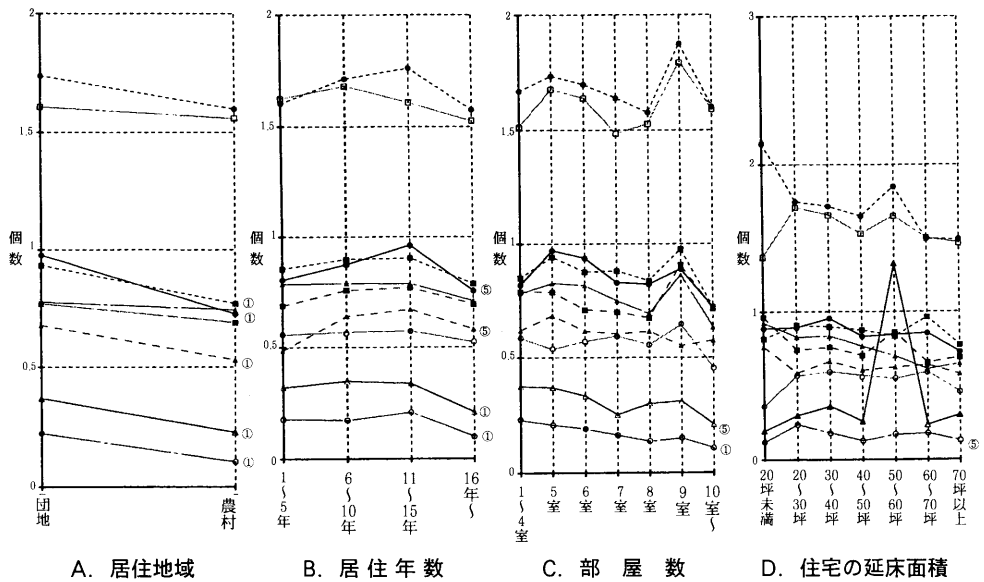
○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図16 メリット評価数と技術革新に対する態度との関連



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

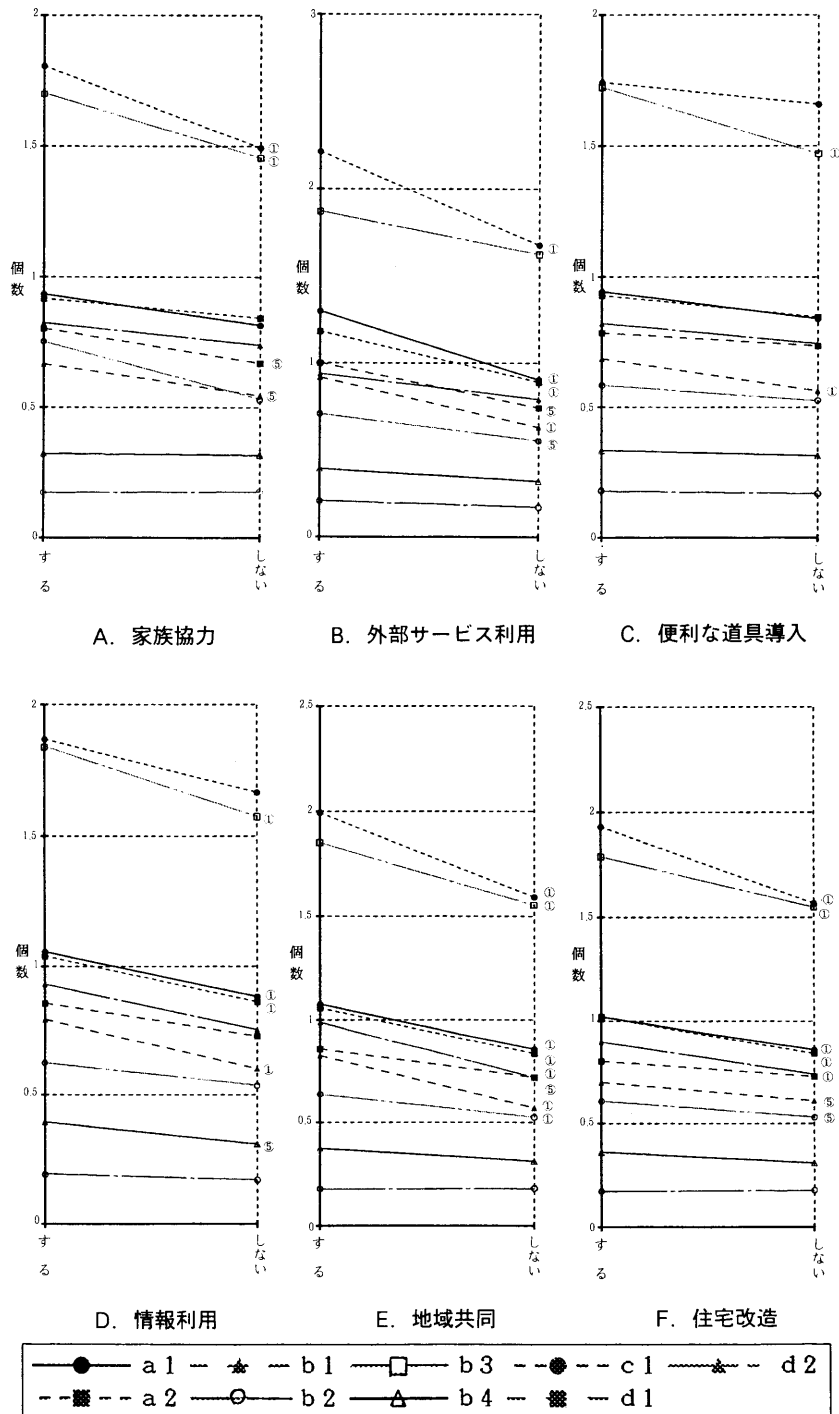
図17 デメリット評価数と家族条件との関連



○内の数字は平均値の差の有意差水準を示す

図18 デメリット評価数と空間条件との関連

家庭における技術革新に関する研究（第2報）



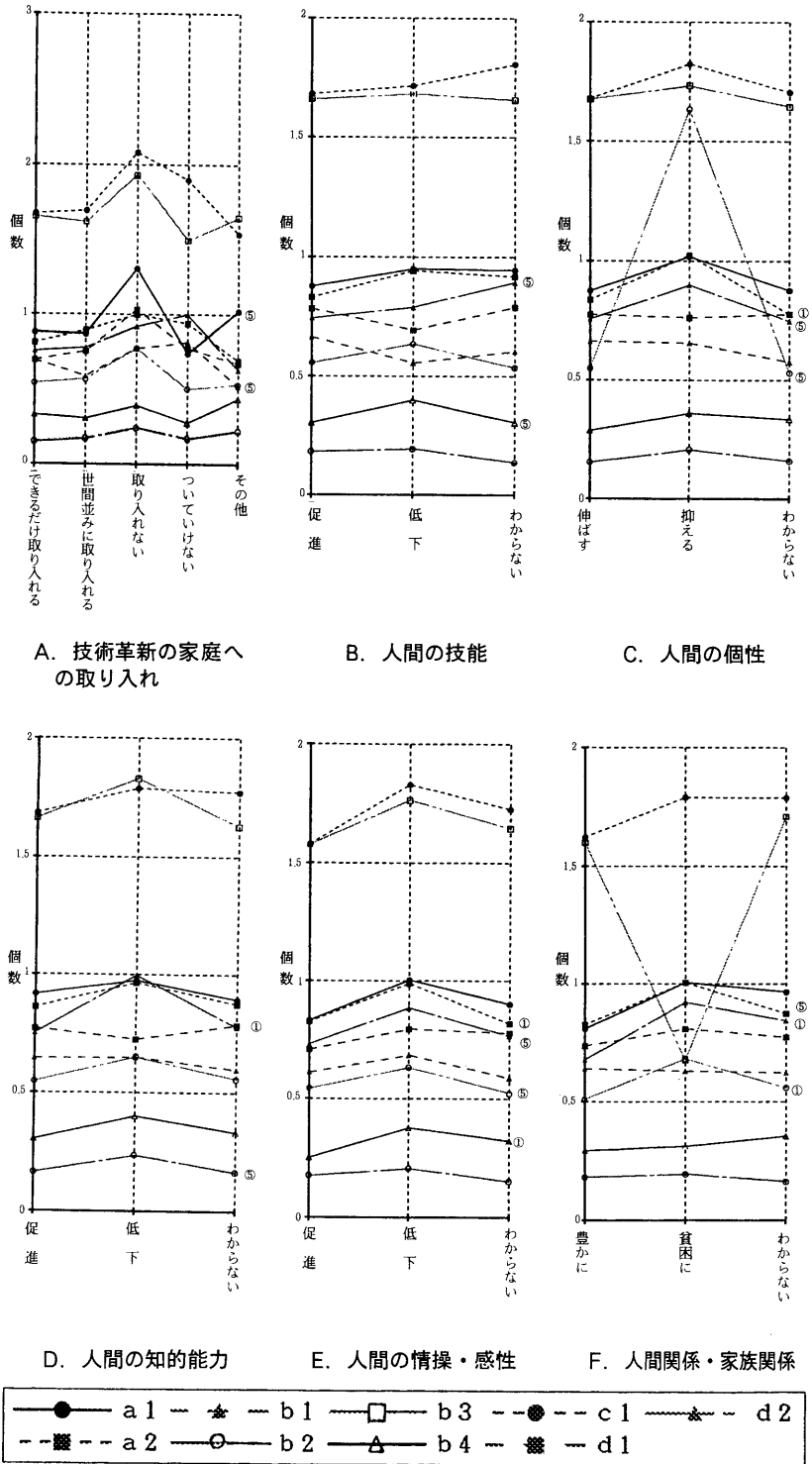


図20 デメリット評価数と技術革新に対する態度との関連

対して、団地居住者の方がデメリット評価数が多い傾向がある。また、居住年数も一定程度の居住年数の段階で、デメリット評価数が多い。

部屋数や延床面積等の住宅の広さでは、住空間面（b2）に対して、狭い方がデメリット評価が多くなっている。

③ 家庭生活の合理化に対する方策

各適応分析軸の各側面のデメリット評価について、各家庭生活の合理化に対する方策の有無別に算出した平均評価数を、図19に示す。

家庭生活の合理化に対する方策を積極的に行うとする場合に適応の多くの側面に対して、デメリット評価が多くなっている。特に、「外部サービス使用」「情報活用」「地域共同」等の家庭外での合理化方策をとる場合と「住まいの改造」の場合には、多側面に対してデメリット評価が多くなる傾向がみられる。

すなわち、家庭生活の合理化に対する方策を積極的に行う場合には、メリット評価が多くなると同時にデメリット評価も多くなるといえる。

④ 技術革新に対する態度

各適応分析軸の各側面のデメリット評価について、各技術革新に対する態度のカテゴリー別に算出した平均評価数を、図20に示す。

技術革新の家庭への取り入れに対して、否定的な場合、「精神・心理面」（a1）、「時間面」（b1）に対してデメリット評価が多くなっている。

技術革新が人間の発達面に対する影響についての考えでは、人間発達のいずれかの側面に対して技術革新が悪影響を及ぼすと考える場合には、「家族への影響」（d1）に対してデメリット評価が多くなる傾向がある。また、人間の技能の発達を低下させると考える場合には、「労働力面」（d4）に対するデメリット評価が多くなり、人間関係・家族関係を貧困にすると考える場合には、「人間発達」（a）に対するデメリット評価が多くなる。さらに人間の個性や情操・感性の発達を低下させると考える場合には、「肉體機能・健康面」（a2）に対するデメリット評価が多くなっている。

すなわち、技術革新が家庭生活や人間発達に悪影響を与えると考える場合には、技術革新に対するデメリット評価が多くなり、適応が阻害されると考えられる。

4. まとめ

家庭生活における技術革新に対する依存と適応の実態を左右する要因について検討するため、団地と農村を調査対象として調査を実施し、団地1,111世帯、農村918世帯の有効サンプルを得た。分析の結果、次のような知見が得られた。

1) 各生活領域におけるモノ所有品目数は、衣・食・住の生活用品と生理・衛生用品については、全調査品目の5〜6割所有されているが、AV機器・事務機器と住宅設備はやや少ない。また、各生活領域におけるサービス使用数は、全調査サービス数の1〜4割で、モノ所有の場合より少なく、家族関係サービスは特に少ない。

2) 各適応分析軸の各側面におけるメリット評価数は、全メリット調査数の2〜5割で、生活の合理化・効率化のうち、時間面および労働力面の軽減化を評価し、モノの性能・機能・取り扱い難易度に対しても評価が高い。しかし、人間発達と家族への影響については、評価が低い。一方、デメリット評価数は、全デメリット評価数の1〜2割であり、技術革新に対しては、全体的に評価する傾向が強いといえる。ただし、経済性の面と社会への影響については、問題意識をもっている現状がとらえられた。

3) モノ所有による技術革新への依存は、空間的に余裕があり、家事の合理化が必要な家族条件の場合に大きくなる。また、年齢的に若い世代で建築年度も新しい家庭での依存度も高い。さらに、家庭生活の合理化をモノや空間によって行おうとしている家庭でも依存度が高く、技術革新の家庭への取り入れが積極的で、技術革新が人間に与える影響を肯定的にとらえる家庭でも依存度が大きくなっている。

4) サービス使用による技術革新への依存は、サービス機関の立地場所が比較的近接している団地の場合に依存度が高く、年齢的には高齢層で依存度が高くなっている。しかし、モノ所有による技術革新への依存の場合と異なり、核家族や専業主婦の家庭等、家事合理化を切実に必要としない家庭での依存度が高い。また、家庭生活の合理化を社会的な解決によっている家庭においても依存度が高く、技術革新の家庭への取り入れに積極的で、人間発達との関連も肯定的な場合に依存度が高くなっている。

5) 技術革新に対する適応状況を分析するため、

各適応分析軸の各側面についてのメリット評価数を基に検討した。全体的に、核家族および団地居住者の方が拡大家族、農村居住者より技術革新に対してメリット評価が高く適応傾向がみられる。また、肉体的な衰えと関連する肉体機能・健康面および労働力面に対しては、高齢層でメリット評価が高く、日常生活が比較的忙しい若年層では、時間面に対するメリット評価が高くなっており適応傾向がみられる。労働力面に対しては妻が有職者の場合に、家族への影響に対しては専業主婦の場合にメリット評価が高く適応傾向がみられる。夫の職業では、ホワイトカラー層では、生活の合理化・効率化に対してメリット評価が高く、ブルーカラー層では人間発達面や社会への影響面でメリット評価が高く適応傾向がみられる。さらに、家庭生活の合理化を積極的に行おうとしている家庭や、技術革新の家庭への取り入れに積極的で技術革新が人間発達を促進すると考える家庭でメリット評価が高く適応傾向がみられる。

6) 技術革新に対する不適応の状況を分析するため、各適応分析軸の各側面についてのデメリット評価数を基に検討した。相対的にメリット評価が高く適応傾向が強くみられた核家族や団地居住者は、デメリット評価も多く不適応の傾向も同時にみられる。また、高齢層、専業主婦の家庭で、デメリット評価が多く不適応傾向がみられる。夫がホワイトカラーの場合、人間発達面においてデメリット評価が多く、ブルーカラー層ではモノの性格面に対してデメリット評価が高く不適応傾向がみられた。住宅が狭い場合には、空間面に対するデメリット評価が多く不適応傾向がある。さらに、家庭生活の合理化を積極的に行う場合や、技術革新の家庭への取り入れに否定的で、技術革新が人間発達に与える影響を否定的にとらえる場合にもデメリット評価が多く不適応傾向がみられる。

以上のように、技術革新に対する依存については、モノ所有による場合は、家庭生活の合理化が必要な家族条件やモノを所有しうる空間条件によって大きな影響を受けている。しかし、サービス使用による場合は、家庭生活の合理化が、特に切実でない家族条件の家庭の方が多く依存している状況がみられる。このことは、サービス使用の状況が、まだモノ所有の状況に追いついておらず、家庭生活の合理化に対して、あまり大きな比重をもっていないこと、あるいは家庭生活の合理化以外の

役割が期待されていると考えられる。ただし、家庭生活の合理化方策や技術革新に対する態度とは大きく関連しており、サービス使用は、物理的な状態よりも意識面による影響が大きいといえよう。

技術革新に対する適応については、年齢、夫と妻の職業等と部分的な関連がみられるが、全体的に、技術革新に適応を示す家庭において不適応の状況も同時に現れており、単純に適応家庭と不適応家庭とに色分けできない状況である。すなわち、技術革新に対して、より意識的に関わっている場合には適応と不適応の両側面が現れるといえよう。このことは、家庭生活の合理化方策を積極的に行なおうとする家庭で顕著に示されており、技術革新に対する態度との関連が非常に大きいことから理解されよう。

注

- 1) 水牛くらぶ編：モノ誕生「いまの生活」、晶文社、1990
- 2) 商品科学研究所+CDI：生活財生態学Ⅲ
- 3) 経済企画庁総合計画局編：21世紀居住の展望と課題、S62
- 4) 鈴木徳彦：住文化の科学、S62
- 5) 日本住宅総合センター：21世紀を目指す住宅技術、1993
- 6) ミサワホーム総合研究所：21世紀の生活トレンド、1989
- 7) 小此木啓吾：一・五の時代、筑摩書房、1987